

tion from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.

論文および著書 (分担執筆)

岡田猛 (1999) 科学における共同研究のプロセス: インタビュー, 質問紙調査, および, 心理学的実験による検討 岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久 編 科学を考える: 人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点 京都, 北大路書房

岡田猛・野上康子 (1999) 科学的研究におけるコラボレーション: 認知心理学の知見から 教育システム情報学会誌, 15, 366-373.

Okada, T. & Shimokido, T. (in press). The role of hypothesis formation in a community of psychology. In K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) Designing for Science: Implication from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.

岡田猛・Crowley, K. (印刷中) 面白い研究のやり方: 発達心理学における二つのアプローチの研究者へのインタビューに基づいて 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次 (編) 人間発達と心理学 東京: 金子書房

Schunn, C. D., Crowley, K., & Okada, T. (in press). Cognitive science: Interdisciplinarity

now and then. In S. J. Derry & M. A. Gernsbacher (Eds.), Problems and promises of interdisciplinary collaboration: Perspectives from cognitive science. Mahwah, NJ: Erlbaum.

書評

Holyoak, K. J. & Thagard, P. 鈴木宏昭・河原哲雄 監訳 (1998). 「アナロジーの力: 認知科学の新しい探求」東京: 新曜社 認知科学, 6, 375-376.

(2) 学会活動

編集委員

認知科学学会誌「認知科学」

Psychologia Society “Psychologia: An international Journal of Psychology in the Orient”

その他

The 2nd International Conference on Cognitive Science プログラム委員 1999年

(3) 招待講演等

日本心理学会小講演「心理学研究における仮説の意味」 1999年9月

研究経過報告

森田美弥子

一昨年10月に教育学部に赴任した。半年間は併任という形で医療技術短期大学部との掛け持ち状態があり、昨年からは本格的に教育学部での生活が始まった。知っているようで知らないことだらけの1年間が過ぎ、あっという間に3年目もう後半に入った。遅ればせながら、この3年間でまとめて報告したい。

1. 学生相談研究

学生相談室専任時代の仕事をまとめるべく、事例を通して青年期発達を考えること、来談への動機づけを中心として大学生の来談プロセスについて検討し自分なりのモデルを提示していくことを課題としている。

<分担執筆>

森田美弥子 1998 良い娘からの脱皮 鳴澤實: 編「こころの発達援助-学生相談の事例から」ほんの森

出版 Pp.30-34

森田美弥子 1999 青年期を生きるということ-学生相談と成長促進 池田豊應・後藤秀爾: 編著「心の臨床・その実践-かかわることの原点から」第6章 ナカニシヤ出版 Pp.83-98

<研究論文>

森田美弥子 1997 学生相談室イメージと来談の関係-大学生を対象にして 心理臨床学研究15 406-415

森田美弥子 1998 心理療法への来談動機-研究の展望と今後の課題 名古屋大学教育学部紀要 (心理学) 45 1-8

森田美弥子 1999 中断事例に学ぶ 名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要14 1-3

2. ロールシャッハ研究

名古屋大学式ロールシャッハ法が独自にもつ「思考・言語カテゴリー」の再構成を目的として、共同研究を行っている。毎年少しずつ学会発表しているが、これまでの成果を集約した論文を現在作成中である。また、名古屋ロールシャッハ研究会で名大法のマニュアルの見直しを始めており、運営委員として加わっている。今年度は既存のマニュアルに必要な最低限の修正をしたのみだが、1, 2年のうちに初の出版をめざしている。

土川隆史・森田美弥子・池田豊應・加藤淑子・下村美刈・長瀬治之・米倉五郎・渡辺雄三：編 1999 ロールシャッハ法解説—名古屋大学式技法—1999年改訂版 名古屋ロールシャッハ研究会：発行

<学会発表>

中原睦美・高橋昇・長野郁也・杉村和美・高橋靖恵・森田美弥子 1997 名大式ロールシャッハ技法における思考・言語カテゴリーの臨床的適用—コミュニケーションスタイルの検討 日本ロールシャッハ学会第1回大会発表抄録集（金沢大学） 22-23
 長野郁也・森田美弥子・高橋靖恵・高橋昇・杉村和美・

中原睦美・星野和実 1997 名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討（V）—作話・恣意的反応の再検討 日本心理臨床学会第16回大会発表論文集（東北大学） 218-219

高橋昇・森田美弥子・杉村和美・高橋靖恵・長野郁也・中原睦美 1998 名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討（VI）—境界例の特徴と心理療法上での現れをめぐる 日本心理臨床学会第17回大会発表論文集（名古屋大学） 256-257

中原睦美・森田美弥子 1999 他系統に渡る疾患を有する62歳女性のロールシャッハテスト直後に心気症状が改善した意味について— 日本ロールシャッハ学会第3回大会抄録集（専修大学） 54-55

3. その他

<分担執筆>

森田美弥子 1998 医療に役立つ心理療法 藤田主一・園田雄次郎：編「医療と看護のための心理学」第9章 福村出版 Pp.117-128

研究経過報告

川上正浩

1998年11月から、1999年の10月に至る1年間の研究成果と研究経過について報告する。この1年は、アメリカでの在外研究後の1年間であり、いろいろな意味での“ペース”を取り戻すのに苦労した1年であった。研究に関しては、在外研究時から引き続き、類似語（neighbors: 当該単語、非単語を構成する文字を一文字だけ別の文字に置き換えることによって作成することが可能な単語）が認知過程に及ぼす影響を検討すべく、データベース整備とそれに基づく実験を行った。

また、岐阜聖徳学園大学の辻井正次氏らと共同で取り組んでいる、学習障害児、アスペルガー症候群の認知機能の研究上の成果を京都学園大学の行廣隆次氏と連名で「高機能広汎性発達障害 アスペルガー症候群と高機能自閉症」（杉山登志郎・辻井正次 編著）の一部として形にすることができた。

以下に、共同研究、上述の分担執筆も含めたこの期間の研究発表を記す。

Saito, H., Masuda, H., & Kawakami, M 1998

Form and sound similarity effects in kanji recognition. *Reading and Writing: An Interdisciplinary Journal*, 10, 323-357.

川上正浩 1998 カタカナ3文字語及びカタカナ4文字語の正書法的類似語数・音韻的類似語数表——Macintosh版岩波広辞苑第四版に基づく類似語数調査—— 名古屋大学教育学部紀要（心理学）, 45, 95-139.

川上正浩・藤田知加子 1998 3拍カタカナ表記語449語の主観的出現頻度とカタカナ表記頻度 読書科学, 42, 125-134.

Saito, H., Masuda, H., & Kawakami, M. 1999 Subword activation in reading Japanese single Kanji character words. *Brain & Language*, 68, 75-81.

川上正浩 1999 カタカナ4文字語を構成するカタカナバイグラム頻度表(I) 読書科学, 43, 1-12.

川上正浩 1999 カタカナ4文字語を構成するカタカナバイグラム頻度表(II) 読書科学, 43, 56-65.

教育心理学教室教官の研究状況報告

- 川上正浩・行廣隆次 1999 認知心理学的視点から 杉山登志郎・辻井正次(編著) 高機能広汎性発達障害 アスペルガー症候群と高機能自閉症 第2章第3節4。ブレーン出版 Pp.88-92.
- 川上正浩 1999 カタカナ語の類似語数が語彙判断課題に及ぼす効果 東海心理学会第48回大会発表論文集, 20.
- Kawakami, M. 1999 Effects of phonographic and phonological neighbors on katakana word recognition. Proceedings of ICCS/JCSS99, 779-782.
- Saito, H., Masuda, H., & Kawakami, M. 1999 Subword activation in reading Japanese single Kanji character word. Proceedings of ICCS/JCSS99, 361-366.
- 川上正浩 1999 非単語の単語らしさに類似語数が及ぼす効果 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 544.
- 川上正浩・吉崎一人・出口智子 1999 類似語数の多寡が漢字二字熟語の語彙判断に及ぼす効果 日本心理学会第63回大会発表論文集, 469.
- 藤田知加子・川上正浩 1999 表記混合が仮名語の語彙判断に及ぼす影響 日本心理学会第63回大会発表論文集, 400.
- Saito, H., Yanase, Y., & Kawakami, M. 1999 Evaluating the wordiness of Kanji pseudo-compounds. Ninth International Conference on Cognitive Processing of Chinese Language and Related Asian Languages. Beijing, Oct. 16-18, p64.